



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4130号 2018.1.9 発行

くらしナビ・学ぶ @大学 障害学生の就職後押し 情報共有や組織連携が重要



毎日新聞 2018年1月9日
立教大学で開かれた障害学生向け就職ガイダンス=東京都豊島区で

今年4月から、事業主に義務づけられる障害者の雇用割合（法定雇用率）が0.2ポイント引き上げられ、民間企業では2.2%となる。障害を理由とした不当な差別を禁じる「障害者差別解消法」も施行から約2年がすぎる。大学での障害学生に特化した就労支援は、まだ手探り状態のところが多く、意欲的に取り組んで

いる大学が注目されている。

●多彩なプログラムの立大

昨年12月16日。東京都豊島区の立教大学で障害学生向け就職ガイダンスが開かれた。「できることとできないことを説明できるように」。就職支援業者の講師の言葉に、耳を傾けたりメモを取ったりする1～4年生の6人。視覚障害のあるコミュニティ福祉学部3年、大島康宏さん（21）は「企業に障害の配慮を積極的にお願いしていいと分かり、気が楽になった」と笑みを浮かべた。

キリスト教の「共生主義」を教えとする同大は、1919年に視覚障害者の在籍記録が残るなど古くから障害学生を受け入れてきた。今は「しょうがい学生支援室」を事務局に13部局のネットワークを作って学生生活全般をサポートする。就労支援はキャリアセンターが担当。スタッフ24人中、障害学生専任を3人配置する手厚さだ。

プログラムも多彩だ。専門ガイダンスの他、就業した障害学生OB・OGを呼んで話を聞いたり、企業見学訪問会を開いたりする。これまで外資系通信社や航空会社の実際の職場を見て、直接社員と懇談した。2015年度の就職率は83.3%と全国の52.9%をはるかにしのぐ。担当する斎藤英成さん（36）は「障害を持って働く具体的なイメージと、前向きな意識を持たせることが重要」と解説する。

日本学生支援機構によると、全国の大学、短大、高专に通う障害学生は2万7257人（16年5月現在）で年々増加。一方で、就労支援は進まず、昨年3月に文部科学省の有識者会議が公表した障害学生に関するまとめでも「一般学生と比べ就職活動が複雑で、早い段階の情報提供や関係機関のネットワーク作りが重要」などの課題が指摘された。「情報共有に学内の縦割り組織や守秘義務の弊害もある」との関係者の声もある。

●就職率は一般学生の半分強

就職率も一般学生97.5%（15年度）の半分強。障害者社員が200人以上いる企業の人事部は「法定雇用率が上がることもあり、大学と連携を密にして雇用を考えたい」と話す。ただ、増える発達障害学生の就労は難題だ。障害者雇用を総合的に手がける「ゼネラルパートナーズ」は「気分の抑うつや行動障害など症例が全員違い、身体障害者に比べ企業も敬遠しがち」と難しさを話す。そうした状況を踏まえ、昨年11月に首都圏の私

立大学就職支援担当者らで作る大学職業指導研究会は、立教大で初の発達障害学生対策セミナーを開催。精神科医・吉田友子さんの講演や先進事例の紹介が行われた。

専修大学（東京都千代田区）就職部は15、16年、在学障害学生や他大学就職支援部にアンケートを実施。障害学生の大半が特化した就労サポートを望んでいることや、学内連携の重要さなどが分かった。就職部は外部支援機関との連携を強化し、昨夏には他大学生にも開放した初の個別企業説明会を開催。同部掛長の遠藤清さん（43）は「我々は障害学生が就職部に来る『待ち』から『歩み寄る』姿勢に変える必要があった。今後も企業や学内外連携を深めて知識を共有したい」と語る。

法政大学（同）は例年、就職支援対象の発達障害またはその疑いのある学生は約25人と推量。キャリアセンタースタッフ約25人のうち3人が担当するが、心構えとして、専門家ではないことを自覚▽複数対応と情報共有▽結果に落ち込まないーなどの5カ条を挙げている。発達障害と気付いていない学生の見分け方もまとめていて、キャリアセンター課長の内田貴之さん（47）は「職場歴10年の経験則から分かったこと。短い期間でノウハウを持つスタッフを増やして対応しやすくしたい」と話す。

● ひとり立ちまで一貫フォロー

国公立大学では富山大学（富山市）が出色だ。在学中から就労移行支援事業所と連携し、同所にある模擬職場で1週間、就労体験ができる。就職後も月に1回程度、大学で面談して職場環境や生活スタイルを聞き、困り事があればハローワークなどと職場を訪れて要望を伝える。学生支援センターの桶谷文哲・特命講師は「継続的な面談と対話で、職場に定着してひとり立ちするまで一貫したフォローをしたい」と話している。【清水隆明】

チアリーダー 垂水の和気さん、米NFLに挑戦 魅力を伝えたい 「将来は障害者チームも」 / 兵庫

毎日新聞 2018年1月8日
サッカーJ1ガンバ大阪のチアダンスチームでパフォーマンスを見せる和気聡美さん。今春、NFLチアリーダーに挑戦する＝本人提供

プロチアリーダーで県障害者スポーツ協会嘱託職員の和気（わけ）聡美さん（26）＝神戸市垂水区＝が今春、米プロフットボールリーグ（NFL）のチアリーダーに挑戦する。イベントやスポーツ大会などで障害者らとふれ合う和気さんは、チアと障害者スポーツをつなぐという、もう一つの夢も抱く。「必ずNFLチアに合格して、頑張れば夢はかなうことを障害のある人たちに伝えたい」と意気込む。

須磨学園高から龍谷大に進学した和気さんは、チアリーダーディンク部に入学



障害者支援 膨らむ期待 読売新聞 2018年01月09日 「ののなファクトリー」で製造される乳清を使ったパン（鳥取市西品治で）

◇鳥取のNPO、収入向上へパン製造所開設

障害者の収入向上につなげようと、障害者も働くパン店やカフェなどを運営するNPO法人「鳥取青少年ピアサポート」（鳥取市西品治）が、県産の牛乳を使ったチーズやパンの製造所を鳥取市内に新たに開設した。高品質の商品を同法人の直営店や県内外のスーパーなどで販売。収益を上げ、製造所や店舗で働く障害者の賃金を現在の3倍に引き上げることを目標に掲げており、県もモデル事業として注目している。（滝口憲洋）

製造所は「nonona（ののな）ファクトリー」（同）。チーズ

工房とパン工場、出荷作業などを行う作業棟の3棟で、働く障害者の活躍を支援する県と日本財団の共同プロジェクトの一環として、同財団から整備費の7割にあたる約5700万円の助成を受け、昨年12月22日にオープンした。

同法人では、これまでも直営するパン店などで県産の材料を使ったパンや焼き菓子などを製造、販売してきたが、今後は生産の中心を同ファクトリーに移すという。工房では大山乳業農業協同組合（琴浦町）の生乳を仕入れ、チーズを製造。工場では県産小麦を原料に、乳製品の生産過程で出来る栄養価の高い乳清（ホエイ）を配合したパンなどを焼く。

販路も県内外に拡大し、同法人は2016年度に約6000万円だった売り上げを18年度に1億円にする目標を掲げる。同ファクトリーは、障害者と雇用契約を結ぶ就労継続支援A型、結ばない同B型のほか、一般企業への就職を目指す障害者の就労移行支援の役割も担う「多機能型」事業所（定員80人）で、障害者もチーズやパンの製造に携わるが、中でもB型の障害者1人あたりの賃金を、16年度の月平均1万9761円から18年度に5万6000円、19年度には6万5000円に引き上げることを目指すという。

県内のB型事業所で働く障害者の16年度の月平均賃金は1万7169円。全国平均（15年度で1万5033円）よりは高いが、障害の程度などによって、業務や勤務時間に制約が生じることなどが理由で、県内のA型事業所でフルタイムで働く障害者の月平均賃金（16年度8万551円）に比べて低いことが課題になっている。

同法人では、新商品販売による収益増と同時に、障害者が働きやすい環境の整備や働き方指導も行い、能率アップによる賃金向上にも取り組む。同法人の山本恵子理事長は「働く障害者がきちんと賃金を得て生活が安定すれば、地域の一員として社会に自然と溶け込めるようになる。地域貢献の一助にもなれば」と話す。

B型事業所での障害者の賃金増を目指す県も、同法人の取り組みを歓迎。ファクトリーの開所式に出席した平井知事は「新しいページが開かれた。大きく花開くことを願う」とエールを送り、県障がい福祉課の担当者も「付加価値の高い商品で売り上げ増を図る事業が成功例となって県内に広がれば」と期待している。

岡山でももぞの学園「アート展」 障害ある子の自由奔放な作品見て



山陽新聞 2018年01月08日

障害のある子どもたちが自由に表現した絵画や造形作品が並ぶ「子どもの世界アート展」＝山陽新聞社さん太ギャラリー
社会福祉法人ももぞの学園（岡山市北区粟井）の障害のある子どもたちが創作した絵画や造形作品の展覧会「子どもの世界アート展」が8日、岡山市北区柳町の山陽新聞社さん太ギャラリーで開幕した。手で絵の具を塗りつけるなど、自由奔放な表現が来場者の目を引いている。

同学園と山陽新聞社会事業団が共催し、入所施設とデイサービス施設に通う2歳から18歳の自閉症、発達障害などの子どもたち約60人の作品約130点を展示した。

会場には、小麦粉を混ぜてどろどろにした絵の具を塗りたくった抽象画、青一色で母親を描いた中学2年男子の人物画、5、6人の子どもたちが思い思いに手形を押した作品など、型にとらわれない絵画が並ぶ。赤、青、黄色など色とりどりに染めた割り箸を紙粘土に突き立てたオブジェ、段ボールを自分のベッドに見立てた工作作品もある。

学園の協力医を務める医師中山堅吾さん（65）＝岡山市北区＝は「障害という垣根を外して見ても、子どもの純粋な感性に感激すると思う」と話していた。

展覧会は昨年、県内の障害者の芸術作品を対象に、同事業団が主催した「きらぼし★アート展」で、同学園の大人の利用者たちの絵画が最優秀賞を受賞したのを受け、子どもたちの作品にも光を当てようと企画した。

14日まで。入場無料。開場時間は午前10時～午後5時（最終日は3時まで）。13日午後2時から、創作活動を担当する職員によるギャラリートークがある。

長浜の児童が絵手紙年賀状 お年寄りらに送り展示

中日新聞 2018年1月9日



小学生がお年寄りらのために書いた年賀状＝長浜市湖北まちづくりセンターで

長浜市湖北地区の小学生が一人暮らしのお年寄りや障害者のために書いた年賀状が、湖北まちづくりセンターに展示されている。三十日まで。

地元の住民グループ「湖北福祉の会」が、お年寄りらに地域とのつながりを感じてもらおうと、毎年子どもたちに執筆を依頼。今回は小谷小四年、速水小六年、朝日小三年の計八十二人がセンターの絵手紙教室から指導を受けて描き、百六十三枚を発送した。

た。

会場では、複写品を展示。招き猫や獅子舞といった縁起物の絵とともに「体に気をつけてください」と相手を気遣う文章や、「持久走のタイムを縮めたい」といった抱負が添えてある。

水曜休館。(問)センター＝0749(78)1287 (渡辺大地)

高齢者らに「思いやり除雪」スマホ活用し作業員に対応通知

寒河江、新庄で新システム



河北新報 2018年1月9日
山形県寒河江市内で作業に当たる除雪車。独居高齢者への「思いやり除雪」が始まった
寒河江市が導入した新システムで、対象世帯に近づくときスマホに表示されるメッセージ

山形県の寒河江、新庄両市は今冬、新たな除雪車運行管理システムを導入し、高齢者や障害者の家の前に雪を押し付けけない道路除雪を始めた。それぞれ市社会福祉

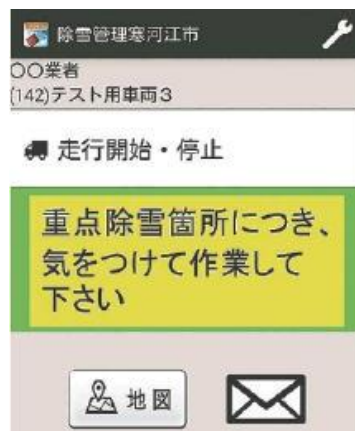
協議会などから情報提供を受け、「除雪弱者」計約100世帯を登録。対象住宅に近づくとき、衛星利用測位システム(GPS)機能でスマートフォンのアラームなどが作動し、除雪車オペレーターに「思いやり除雪」を促す仕組みだ。

両市が導入したのは、スマホのGPS機能で除雪車の位置情報を管理するシステム。NDソフトウェア(南陽市)が本年度、事前に登録した地点に近づくとき、スマホのアラームやメッセージが作動する機能を既存商品に加えて発売した。

寒河江市は市社会福祉協議会、新庄市は市福祉事務所からそれぞれ対象世帯の情報提供を受けた。寒河江市は要介護3以上の独居高齢者約80世帯を、新庄市は独居高齢者や身体障害者の計約20世帯を対象として登録している。

個人情報保護のため、除雪作業の受託業者に提供されるのは「場所の特定に必要な最低限の情報に限定」(新庄市都市整備課)されている。

除雪車に配備されるスマホに、アラームや「重点除雪箇所につき、気をつけて作業して下さい」というメッセージで現在地が対象世帯であることを通知。住所や住民の氏名などが表示されることはない。



システム導入によって市や受託業者は作業時間や経路を簡単に把握できるようになり、事務作業の軽減や作業経路の効率化も図ることができるという。

市のウェブサイトには除雪車の現在地を示す地図が掲載され、市民が自宅周辺の除雪状況を確認できるといったメリットもある。費用は寒河江市が730万円、新庄市が900万円。

寒河江市の担当者は「システムを生かして寒河江型のやさしい除雪を進めていきたい」と話す。

災害時の人権に配慮、避難所で役立つ製品研究 真岡工業高 下野新聞 2018年1月9日 避難所の課題を協議する生徒



【真岡】2017～18年度、県の人権教育研究学校に指定されている真岡工業高では、「防災」の観点を取り入れた人権研究に取り組んでいる。18年度には全4学科の生徒がそれぞれの専門性を生かし、「災害時における人権に配慮できる環境整備」として避難所などで活用できる製品を製作予定。工業校ならではの研究を進める。

同校では2011年の東日本大震災で、実習棟や体育館など4カ所が損傷。約3カ月間、立ち入り禁止になるなど授業にも大きな支障が出た。

震災以降、市から災害時の緊急避難場所に指定されたこともあり、同校では「防災教育」に注力。生徒が体育館に泊まりがけで避難所生活を体験する防災キャンプなども実施してきた。さらにこうした取り組みを人権と絡め充実させようと、研究学校の指定事業に手を挙げた。

本年度は災害時、自力での避難が難しく支援を要する「災害弱者」への理解を深めようと身体障害者らの思いを聞く講演会も開催。機械科、生産機械科、電子科、建設科の生徒が避難所の現状や災害弱者への対応事例を学び、18年度に避難所で災害弱者を補助できるような製品作りに取り組むことにした。

新図書館に本型アート 自閉症男性が原画 新徳山駅ビル 読売新聞 2018年01月09日



本型アートの原画の一部（周南市提供）
アトリエで創作に励む徳原さん



周南市の障害福祉サービス事業所「周南あけぼの園」で創作活動に取り組む徳原望さん（31）が、2月3日にオープンする新徳山駅ビルの図書館に展示される本型アートの原画を制作した。アートは縦5メートル、横約18メートルの大きさで、駅ビルのシンボルとなる。徳原さんは「駅ビルを訪れる多くの人に見てもらいたい」と話している。（佐々木道哉）

自閉症の障害を持つ徳原さんは、同園の「アトリエ non」に所属。子供の頃から絵を描くのが好きで、風景や草花、動物などをモチーフにした鮮やかな色彩の作品が人気を呼び、同園のポストカードやカレンダーを手がけている。2011年から4年連続で二科展デザイン部で準入選するなど数々の受賞歴がある。

図書館を核施設とする駅ビル（鉄骨3階建て、延べ約5250平方メートル）は、レンタル大手「TSUTAYA（ツタヤ）」を展開するカルチャ・コンビニエンス・クラブ（C

CC)が指定管理者となり、運営する。

同様にCCCが運営する佐賀県武雄市や神奈川県海老名市の図書館では、「本に囲まれた空間」を演出するため、背の高い書棚を配置。書棚の手の届かない部分には紙製のダミー本などを並べている。徳山駅ビルの図書館にも、1階と2階の吹き抜け部分に高さ8・8メートル、幅約24メートルの巨大な書棚が設置される。

市は「他の図書館にない特色を出したい」とCCCと協議。繊維強化プラスチック製のダミー本の背表紙に絵を描いた本型アートを制作し、展示することにした。書棚のほぼ上半分にダミー本を並べ、全体で縦5メートル、横約18メートルのアートを作り出す。

「地元で活躍するアーティストに描いてもらいたい」と、徳原さんに原画の制作を依頼。「本のまち」をテーマに建物や人物などを描き込み、約1か月かけて10種類の原画を完成させた。現在、デザイナーがダミー本一つ一つに原画を模写する作業を進めている。

徳原さんはこのほかにも、駅ビル2階の壁面に徳山駅の歴史を題材にした絵を描く予定。3階には、「アトリエ non」に所属する藤村義孝さん(46)の絵画も展示される。

徳原さんは「描くのは大変だったけど、楽しかった」と振り返る。同園支援員の小川のりひろ

矩寛さん(35)は「2人の作品が駅ビルに展示される日が待ち遠しい。園の活動を多くの人に知ってもらいたい機会にもなる」と喜んでいる。

妊産婦うつ診療に医療機関消極的 回答「よい」県内わずか19施設

山陽新聞 2018年1月9日



精神科や心療内科を掲げる岡山県内の医療機関のうち、産後うつなどメンタルヘル스에不調を来した妊産婦を診療してもよいと回答したのは全約170施設のうち19施設にとどまることが、県産婦人科医会のアンケート結果で分かった。胎児や母乳への薬の影響や産後のホルモンバランスの変化といった妊産婦特有の難しさなどが診療に消極的な要因になっているとみられる。

結果によると、19施設のほとんどは岡山、倉敷市にあり、県北の施設はゼロ。施設の規模別では、診療所(19床以下)が11、病院(20床以上)が8だった。「診療は可能だが、あまり受けたくない」と本音を漏らす施設もあった。

過去3年間で実際に妊産婦を診療したことがあるとしたのは約10施設しかない上、ほとんどの施設は治療をした人が数人だった。産後うつは10%程度、統合失調症などその他の精神疾患も妊産婦の1、2%がかかるとされており、メンタルヘル스에問題を抱える妊産婦の多くは専門の医療機関を受診できていないことがうかがえる。

ただし、地域で中核的役割を果たす病院の中には回答がなかったところが複数あり、実際に妊産婦を診察しているところはもう少し多いとみられるという。

診療できるとの回答が少ない理由として、県産婦人科医会は、処方する薬によっては胎児の発育や母乳に影響を与えかねないことや、産後うつはホルモンバランスの変化によって症状が変わりやすいことを挙げる。さらに、子どもへの虐待が隠れていることもあり、診療に対する医療スタッフの精神的負担が大きいことなどが考えられるという。

同医会は近く、今回の調査で妊産婦を診療できると回答した医療機関のリストを作成。妊産婦がどこへ行けば治療を受けられるかが分かるよう、妊婦健診や分べんを行う医療機関に置いてもらう方針だ。

調査を担当した中塚幹也・岡山大学院教授(県産婦人科医会理事)は「情報を提供して早めの受診につなげ、母子が精神的に追い込まれるような事態を食い止めたい」と話し

ている。

「福祉」映画で紹介 監督らトーク、フクシネマススペシャル 福祉民友 2018年1月9日
映画観賞やトークを通して福祉の考え方を共有したフクシ
ネマススペシャル



福祉映画上映と監督らのトークを行う「フクシネマススペシャル」は7日、福島県いわき市平のいわきPITで開かれ、市民が映像を通して福祉について考え方を共有した。

表現活動を通して福祉への関心を高めようと取り組む交流団体「フクシノワ」といわき潮目文化共創都市づくり推進実行委員会、市の共催で、「いわき潮目劇場」カルチャーショックプログラムとして開

た。

はじめに福祉をテーマにした「つぐむもの」を上映し、同映画の犬童一利監督とはじまりの美術館（猪苗代町）の岡部兼芳館長、県立博物館の小林めぐみ主任学芸員、フクシノワの早坂攝主宰の4人が福祉と表現活動の可能性について話した。

犬童さんが映画製作の背景を紹介したほか、早坂さんが福祉を説明する手段として映画を選びこれまで活動してきた経緯などを話した。

高齢者の癒やしに 切り絵作家・宇根さんが初個展 神戸新聞 2018年1月9日



緻密なデザインの切り絵を出品した宇根利幸さん＝さんさんギャラリーオアシス

創作切り絵作家の宇根利幸さん（49）＝兵庫県三木市緑が丘町中＝が、自身初の個展「紙技」を、さんさんギャラリーオアシス（同）で開いている。阪神・淡路大震災を機に衣装デザインの専門職から介護の道へ転じ、高齢者を喜ばせようと8年前から制作。手作りの繊細な切り絵50点以上を出品する。入場無料。

宇根さんは大阪芸術大学を卒業後、劇団四季（横浜市）で2年間衣装を担当。震災後、父親が営むリフォーム業を手伝ううちに福祉への

関心を高めた。三木市の高齢者施設に勤め、入居者の誕生日祝いとして壁に飾る切り絵を始めた。

会場には、チョウ約100匹を色調ごとに段階的に並べた作品や、鳥の羽根で囲ったクジャクの姿、本物のような紅葉やイチョウも並ぶ。デザインカッターなどを巧みに操り、緻密に表現する宇根さんは「紙に一手間掛けると表情が出て、作る楽しさが完成まで続く。年々作品が立体化している」と生き生きと語る。

現在、神戸市須磨区の医療福祉施設で介護支援専門員を務め、同僚の訪問看護師（51）＝神戸市西区＝は「寝たきりの人の心を癒やし、生きる希望になっている」と話す。

19日まで（水曜休み）。宇根さんは土、日曜と19日に対応。午前9時～午後5時（19日は同3時）。同ギャラリーTEL0794・87・2633（井川朋宏）

障害者アート、三方よし 格好良さ広め、自立支援 旅館で展示、自販機装飾も 滋賀

産経新聞 2018年1月9日

障害者アートの魅力を発信し、制作者の経済的自立につなげようという取り組みが県内で盛んだ。県が料金を払って絵画などを借り、旅館に展示したり、工房が自動販売機の装飾に用いて売り上げの一部が還元される事業に参加したり。関係者は「多くの人に作品の格好良さを知ってほしい」と期待する。

障害者アートは、フランス語で「生の芸術」を意味する「アール・ブリュット」とも呼ばれる。県内には制作施設が50カ所以上ある。

「リンゴ、作るの」。湖南省の児童福祉施設「近江学園」で作家、西川智之さん（43）が粘土の塊と向き合っていた。卒業後も学園を作業場とし、国内外の展覧会に出品している。粘土に竹串で顔を描き、塊に貼り付けていく。「できた」。小さなウサギがぎゅっしり乗った「りんご」が完成した。

西川さんの作品は長浜市の「旅館紅鮎」に飾られている。県の展示事業の対象施設の一つ。旅館紅鮎の山本享平さんは買い取りも考えているという。「作家にとってはより多く収入が得られ、こちらとしても自由に飾ることができる」と話す。湖南省では市内在住の作家から絵画を買い取り、平成27年からふるさと納税の返礼品に導入している。

約80人の通所者が制作活動をしている甲賀市の「やまなみ工房」は、作品でラッピング装飾した飲料の自動販売機の設置場所を募集している。日本財団の「夢の貯金箱」事業を活用し、売り上げ1本につき約10円が還元される。自販機が増えれば現在約1万円の月給をベースアップできるという。

各地から問い合わせが相次いでいるといい、やまなみ工房の職員、戸田理恵さん（39）は「全国に置かれた自販機が、作品の格好良さを知ってもらうきっかけになり、ファンが増えれば障害者の自立につながる」と期待している。

障害児の絵や雑貨に彩り 静岡のショップ、開店1年 静か新聞 2018年1月9日



ココワオリジナルの商品を手にする須田代表（右）ら＝静岡市清水区清水町のココワショップ

障害のある子が描いた絵をモチーフにした雑貨を制作、販売している静岡市内のグループ「cocore（ココワ）」が、同市清水区の次郎長通り商店街に初の店舗「ココワショップ」を構えてから、まもなく1年。「かわいい、面白い」をきっかけに、障害に興味を持ってほしい。福祉の入り口のような存在になれたら」。グループの願いを

発信する拠点となっている。

メンバーは、自閉症や発達障害の子の母親や美術教師、福祉施設職員ら19人。4年前に結成し、2017年1月に須田亜紀代表（49）の実家の眼鏡店跡をショップに改装した。バッグやポチ袋、マグカップ、ペンケース、洋服など、カラフルでデザイン性の高い商品が並ぶ。ココワオリジナル商品のほか、全国から、障害者が制作に関わったおしゃれな雑貨も仕入れている。

品ぞろえに引かれて、清水港に泊まった客船の乗客など観光客が立ち寄り、土産として買っていくこともある。「この絵を描いた子は、魚が大好き。こだわりが強いという自閉症の特性が生み出した作品です」。交代で店に立つメンバーは、商品に詰まった一つ一つの物語を説明する。須田さんは「子どもたちのポジティブな面を伝えたい」と話す。

営業は月、木、土の各曜日、午前10時～午後3時。「障害のある子のお母さんたちにも、気軽におしゃべりに来てほしい」と呼び掛けている。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

